

第1章 新キャプテン誕生

谷口が墨谷二中を卒業し、新チームが本格的に始動し始めた。墨谷二中野球部は目の前にせまった春の全国選抜大会に向けて練習に取り組んでいた。そしてとうとう今日は新入生が入部する日であった。

1・1 教室で…

新しく墨谷二中の野球部キャプテンとなった丸井も三年生になり生徒全員から注目をあびていた。

生徒A「ヨオ新キャプテン！」
丸井「ヨッ。」

生徒A「すごい人気じゃねえか。」
丸井「なにになに…」
生徒A「おまえんとこ入部希望者が殺到してんだってなあ。まったくうらやましいぜ！ おれんとこ柔道部なんてたったの九人よ。まったく不公平な話だぜ。」
丸井「そりゃちがうぜ。やることをやって実績をつくりやおのずと人はあつまってくるものよ。世の中ってえもんはそういうもんじゃねえかな。」
生徒B「やっぱり言うことがちがうぜ。」

同じクラスの柔道部員と話をしていると、同級生の千葉が声をかけた。

千葉「丸井、また上ばきまちがえたな？」
丸井「いけね……」
女生徒A「まだ足が地についてないのね。」

1・2 野球部の部室

放課後、部室から見えるグラウンドには大勢の野球部への入部希望者が集まっていた。

加藤「また、ずいぶん集まったもんだぜ！」
島田「まったく！」
加藤「一年生にしちゃ、ずいぶんでかいのがいるなあ。」
島田「なんせ、野球部に入りたくて越境^{えうきよう}入学したのも、そうとういるらしいぜ…。」
加藤「やっぱり、なんだって全国大会で優勝したのがきいたんかな。」
島田「そりゃ、そうよ！」

1・3 グラウンドで…

数多くの新入部員が整列して待っている。

加藤「では、キャプテンの丸井さんからあいさつを一言。」

丸井は新人生の前に立ち話し始めようとしたその時、一番からだが大きい新入部員に目とまいった。

丸井「ボタンがはずれてるぞ。」

近藤「はあ〜？」

丸井「下だ、下っ。」

近藤「これなあ、チャックいいまんねん。」

丸井「いちいち口ごたえすんな。このう…きさま、なんてえ名前だ？」

近藤「近藤いいまんねん。」

丸井「おれがキャプテンの丸井だ。みんなもしつてのとおり、わが野球部はまるで無名チームから全国大会優勝チームにのしあがったんだ！ それまで地区予選でさえ通過できなかったおれたちがたった一年でここまでこれたのはなぜだかわかるか。それは前キャプテンのおこなったおまえたちの想像を絶するような練習と努力があったからだ。おれもそれをうけつぐ。そしてより強力なチームにしていくつもりだ！ 安易な気持ちで入部したものはいまのうちにやめたほうがいいぞ。」

二、三年生は新キャプテン丸井のあいさつを聞きながら、お互いに顔を見合わせていた。

イガラシ「ちよつと、気合いがはいりすぎじゃないか…」

イガラシがつぶやくが、丸井は気がつくようすもなく新入部員に今日の練習計画を告げた。

丸井「ようし、じゃあ、おまえたちの今日のスケジュールを言う。最初からボールをにぎれると思ったらおおまちがいだぞ。まず全員で草むしり、それが終わったら用具の手入れと部室の掃除だ。さっそくかかれ！」

一年生「は、はい。」

丸井「ちよつと、待て。整列しろってんだ。」

丸井は外野の方に歩き始めた新入部員を呼び止めた。

丸井「きさまら、返事の仕方もしらんのか？ かかれ！」

一年生「はい。」

丸井「声が小さい！」

一年生「はいっ！」

丸井「もたもたするんじゃないぞ。」

一年生「はっ、はいっ！」

新入部員は全速で走った。その様子を見ていた部員達はあきれたような顔で丸井を見ていた。

丸井「へへーっ、こういうことは、最初がかんじんだからな。」

イガラシ「丸井さん。」

丸井「一応、キャプテンって呼んでくんねえか、立场上まずいんだよ。」

イガラシ「あ、どうも。」

丸井「で、なんだ？」

イガラシ「おれ、全国大会で肩をこわして、まだムリがきかないんですよ。」

丸井「それで。」

イガラシ「あれだけいるんだし、選抜に補強できるのがあるかどうかテストしたらどうです。」

丸井「一年生は九月まで体力づくりって規則があるじゃねえか。それをまげて新入部員がしめしがつくと思ってるのか。それに谷口さんがリリーフとして、二人も準備してたじゃねえか。」

イガラシ「しかし、谷口さんはその規則がありながらおれを使いましたよ。」

丸井「そういや、そうだな。たしかに谷口さんはそうしたな。」

イガラシの谷口という言葉に反応した丸井の決断は速かった。

丸井「新入部員、集合！」

外野に散らばっていた新入部員が集まってきた。

丸井「いいか、これからおまえたちをテストする。それに合格したものは選抜の補強人員にする。」

一年生「……？」

丸井「テストにそなえ、ランニングと柔軟体操をやってこい！ かかれっ！」

一年生は言われたとおりにランニングを始めた。

近藤「すぐ、気のかわるお人やなあ。」

1・4 前キャプテン谷口の影…

選抜の補強人員にするテストのため新入部員がグラウンドをランニングしている姿を上級生達が見ていた。

イガラシ「どうです？ キャプテン。」

丸井「かなり、走りこんでるものもあるな。この調子なら補強人員がでそうだな。」

イガラシ「それどころか、ひよつとすると、大幅にオーダーを変えることになるかも…。」

丸井「い…、今なんて言った？」

イガラシ「大幅にオーダーが変わりそうだと言ったんです。」

丸井「バ、バカな。なに言ってるんだ。どうしてオーダーを変えなくちゃなんねえんだ？」

イガラシ「そのためにテストするんですよ。」

丸井「これはあくまで、補強人員としてよ。」

イガラシ「しかし、力のある者がいれば、レギュラーとして使ったって良いと思いますがね！」

丸井「バ、バカな。いまのオーダーは谷口さんが決めたオーダーなんだぞ。それを勝手に変えようって言うのか。谷口さんはな、チームワークとかおれたちのためにと、よく考えて決めてくれたんだぞ！」

イガラシ「しかし、おれの肩も思ったほど良くならないし、リリーフの二人だってまだ完全に仕上がっていないでしょ。谷口さんのいたときは、状況がちがうんですよ。」

丸井「じ、じゃあ何か、おまえは谷口さんの決めたことにケチをつけようってのか！」

イガラシ「いや…そんなこと言ってるわけじゃないですよ。」

丸井「ここまでなれたのは誰のおかげなんだ！ 谷口さんのおかげじゃないか！ 断っておくがな、おれは、誰がなんと言おうと谷口さんの決めたオーダーでいく！」

イガラシ「谷口さん、谷口さんって、今のキャプテンは丸井さんなんですよ。」

丸井「だ、だからなんだって言うんだ。」

イガラシ「もっと。自分なりの意見をもったらどうなんですかね。」

丸井「だ、だから谷口さん…。」

高木「くすっ。あっ…。」

丸井「わ、わかったよ。みんなもそう思ってたんだ。イガラシ、おまえがキャプテンやりやいいだろ！」

イガラシ「ま、丸井さ、いやキャプテン！」

丸井「うるせえっ。おらあキャプテンおりたんだ！」

加藤「な、なにも、そんな。」

イガラシ「ほっとけ、ほっとけ。」

丸井はみんなに背を向け、グラウンドを歩いて部室に向かった。一人部室の中に入り、落ちていたやかんをけとばした。



丸井「くそっ。つめてえやつらだ。全国大会で優勝できたのはみんな谷口さんのおかげじゃないか！ その谷口さんをどうこう言うやつらをおれは引っぱっていく気はない。」

丸井は自分のロッカーにしまつてある谷口前キャプテンの写真を手にした。

丸井「谷口さん……、うう……。」

グラウンドではレギュラーを中心とした二、三年生の話し合いがもたれていた。

高木「よわったな。」

小室「新入部員がはいって初日だって言うのに……。」

イガラシ「……」

イガラシは自分が最初に言い出したことからのめごとに責任を感じていた。

イガラシ「よし、おれがもう一度話してみるよ。」

イガラシが部室に向かつて歩き始めたとき。部室から丸井が歩いてきた。

丸井「やっぱり、続けるよ！ 谷口さんは最後の最後まで何事も投げするようなマネはしなかった。」

ナインはみなホッとした表情で顔を見合わせた。

丸井「全員集合！ モタモタすんな！ これからおまえたちの中に、レギュラーになれる者がいるかどうかテストする！」

一年生「レ、レギュラーだつてさ。」

丸井「さあ、おまえたちも手伝ってくれ。」

イガラシ「すみません、ムリ言っちゃつて。」

丸井「いいさ、谷口さんだって、きつとこうしただろうからな。」

イガラシ「……。」

1・5 新入生近藤登場

ランニングを終えた新入部員を前に丸井は今から行われるテストについて説明した。

丸井「おまえたちのなかでレギュラーになる自信がある者は前にでろ。ただし春の選抜に起用するから、いますぐつかえる者にかぎる！」

一年生A「は……春の選抜だつてさ。」

丸井「自信のある者は前にでろ！」

一年生B「ちよつと……へへ……」

一年生C「すまないな……」

近藤「ちよつととおしてんか！」

一年生D「へへ、おれも！」

丸井「六人か、もう他にはいないか？ いないようだな。このテストはすぐ実践に使える者を選ぶことが目的だ。断っておくがきびしいぞ！ まず守備から始める。イガラシ、ノックしてくれ。」

テストはまず守備練習から始まった。イガラシが打った球をキャッチャーの小室に返球する基本的な練習のテストだった。

丸井「つぎっ！」

近藤「は、はいな。」

丸井「はいと言え、はいと！」

近藤「ワイ関西からきたんや、これ方言なんやねん。」

丸井「返事くらい、標準語を使え。気がゆるむ。わかったな！」

近藤「はいな。いや…、はいやった。」

丸井「ま、いい、続ける。」

イガラシ「はい。」

「カーン」

イガラシが打ったなんでもないゴロを近藤はトンネルした。近藤は照れくさそうに笑ってごまかし、ナインはあきれた表情で近藤を見た。

近藤「ハラ……アハ……。」

丸井「て、てめえ、それでレギュラーになれると思ったのか。墨谷二中をなめるな、バカヤロウ！ つぎっ！」

守備のテストが終わり、次はバッティングのテストが始まった。

丸井「よし、次はバッティングだ。河野投げろ。」

遠藤「たった二人か。」

マウンドにはリリーフの河野が立った。守備練習を合格した二人が打席に立つが、そのうち一人が打球にさからわずに打つミート打法で合格した。

次の遠投テストのため外野に向かって歩き始めた丸井とイガラシだったが、守備練習で不合格だった近藤が丸井のところにやってきた。

近藤「キャプテンさん、ワイにも打たせてえな。」

丸井「おまえは失格なの、失格！」

近藤「そんなこといわんと、一球でええんや。」

丸井「てめえと遊んでいる暇はないんだよ！」

近藤「ワイかて、遊びでいうとるわけやおまへんで。」

丸井「ふーっ……。河野、遊んでやれ。」

河野「はい。」

近藤「すんまへん。」

丸井「まったく、あんなずうずうしいやろう、初めてだ。」

イガラシ「ぷっ…。」

「カーン。」

二人の頭の上を打球が越えていった。おもわず二人とも立ち止まりバッターボックスに目をやった。

近藤「へへ…いかがだす。」

丸井「河野！ もう一球投げてみる。」

河野「は…はいっ。」

近藤「ほら、きた。」

「カーン。」

今度の打球はライナーでセンターの金網に当たった。

丸井「つづけろ、河野！」

近藤「そう、こなくっちゃ。」

「カーン、カーン。」

近藤は河野の投げるボールをいとも簡単に外野に運んだ。

イガラシ「すごい、パワーですね。」

丸井「河野！」

丸井は指をまげて、ピッチャー河野にカーブを投げるように合図した。バッターボックスの近藤は河野の投げた変化球を見のがした。

小室「どうした、ストライクだぞ。」

近藤「ボールでもかまへんから、まっすぐ投げてえな。」

小室「バカが、試合でまっすぐ投げてくれないか。さあ打ってみろ。」

河野が投げた二球目の変化球に近藤はまったくタイミングが合わずに、大きくバットが空を切った。

丸井「こんなことだろうと思った…。」

最終の遠投テストに残った一年生はたった一人。

丸井「ここでいいだろう。いくぞ、キャッチャーっ。さあここから力いっぱいキャッチャーに投げてみる。」

一年生A「はいっ。」

一年生の投げた球は山なりのボールでキャッチャーに届いた。

丸井「ふーん、まあまあだな。」

近藤「あもう、キャプテンさん。たびたびなんです、ワイにも投げさせてえな。」

丸井は近藤を無視した。

丸井「今度はワンバウンドでやってみろ。」

一年生A「はい。」

近藤「ほな、ワイも！」

丸井「待て。投げたらクビだぞ。」

近藤「ク、クビ？」

丸井「どうした、投げろよ。」

近藤「クビね…。クビ…クビ…、いいでしょクビも！」

近藤はボールに語りかけるように投げようかどうしようか悩んだが、意を決したように投げた。その送球は矢のようにキャッチャー小室のミットにおさまったのだった。丸井とイガラシはぼうぜんとして近藤を見た。

近藤「あー、すっきりした。どうもお手数おかけしましたなあ。ほな、さいなら。」

立ち去ろうとする近藤の背中に向かって丸井が声をかけた。

丸井「ちよって待て！ も、もう一球投げてみる。」

近藤「なんぼでも、投げまっせ。ワイ、ピッチャーやってたんや。」

近藤の投げる球は吸い込まれるようにキャッチャーのミットに向かっていった。

イガラシ「マウンドから投げさせてみたらどうでしょう。」

丸井「う…うむ。」

一年生A「あもう、ぼくは…？」

丸井「あ、もういい。」

1・6 ピッチャー近藤

全員が注目する中で新入生の近藤がマウンドに立った。

近藤「ほな、いきまっせ。」

初球をキャッチャーの小室に向かって投げ込んだ。

「ズバーン！」

キャッチャーミットから大きな音が鳴り響いた。

「す…すごい。」

一年生はもちろんのこと、墨谷ナインもその球の速さに驚くばかりであった。

小室「ほーっ、いて。」

丸井「つづける。」

近藤「ほい、きた。」

近藤は二球目、三球目と投げ込んだ。

小室「だ…、だれかかわって！ おねがい！」

小室がたまらず丸井のもとにかけよった。

丸井「本物だな、こりゃ。」

イガラシ「あの球なら、レギュラーとしてもうしぶんないですよ。」

丸井「ま、まてよ。そりゃ、あのピッチングは認めるさ。しかしなんだ、あの守備や、バッティングは…。」

加藤「そうだな、バントされたらいちころだぜ。」

丸井「当たり前だ！」

イガラシ「しかし、小細工であの球は打たれるとは思えませんかね。」

島田「うむ、それもそうだな。」

イガラシ「守備の方は、選抜までにおれがなんとかします。」

丸井「そりゃ、あめえな。そんなにうまくいくわけがねえ。」

イガラシ「そこを何とか…。」

丸井「たとえ、うまくいったとしても、チームワークのことも考えてみろ。ずうずうしいといううか、ふてふてしいといううか、あれが一年生のとる態度か！」

高木「キャプテン。」

丸井「ん？」

高木「そりゃ、チームワークのこともわかりますが、イガラシの肩の故障のことも考えてあげたらどうですか。」

丸井「あ、そうだった。悪かった。おれ、ああいうタイプだいきらいなんだ。キャプテンさんと言われただけでムシズが走るんだよ。しかし場合が場合だし、キャプテンという立場上好ききらいで、人をはかるわけにもいかん。ま、心配するな。このさいおれがめんどう見てやるよ！」

イガラシ「すみません。」

丸井「ちよつとこい！」

近藤「はいな。いえ、はい。」

丸井がマウンドに立っている近藤を呼びよせた。

丸井「おまえをレギュラーにすることに決定した。春の選抜にまにあうようみっちりしごくから覚悟しとけ。」

近藤「おおきに！」

丸井「ただし、日がないから守備だけでもなんとかせにゃあな。さっそく、始めるぞ。守備につけ！」

しかし、近藤は動こうとしない。

丸井「どうしたんだ？」

近藤「ワイ、守備なんかいやなあ。」

みんな近藤の言葉に驚いた。

近藤「だいたい守備の練習は必要あらへんで。さわれるような球なんか、ワイ絶
対投げへんねん。」

みんなの驚いた顔に近藤はようやく気づいた。

近藤「ワイの言うてること、おかしいやろか…。」

その時だった。キャプテン丸井がバットをつかんだ。

「キャプテン！」

イガラシ「な、何をするんです。」

河野「あんなの相手にしなさんな。」

ナインが丸井のまわりを取り囲み、近藤とのいざこざをやめさせようとした。

丸井「かんちがいするな！　なあ近藤、さわらせねえって言ったな。投げてみる！」

近藤「ほな！」

1・7 丸井対近藤の対決

マウンドには新入生の近藤がピッチャーとして立ち、バッターボックスにはキャプテン丸井が立った。

近藤「えんりょなく、いきまっせ！」

近藤は初球を投げ込んだ。丸井はあまりの球の速さにタイミングがあわず空振りしてしまった。ナインはそれを見て驚いた表情で勝負を見つめた。

近藤「いかがでつか、ほな、もうひとつ。」

近藤の投じた二球目、今度は球のスピードにあわせてバットを出したが、バックネットに当たるファールボールとなった。丸井は手のしびれから近藤の投げたボールが並はずれたボールだと感じたが、キャプテンとして打たないわけにはいかなかった。

丸井「さわらせねえだど？　どうした、さあ、どんどん投げろ！」

近藤「さすが、墨谷のキャプテンや…。ほな、これは…どや！」

近藤の三球目、丸井はバットの芯こそはずされたがピッチャーライナーの小飛球を打つ。守備のできない近藤はこのボールをよけることで精一杯だった。

丸井「なんだ、そのぶざまなかつこうは！　はやく次を投げねえか！」

近藤は自分が自信一杯に投じた打球が打ち返されたことで、マウンドから立てないでいた。

丸井「ちつとは、さめたか。えつ。小学生のガキどもとやってたのとはわけがちがうんだ！　しかも選抜ともなると、おれなんか足もとにもおよばないバッターがゴロゴロしているんだ。いい気になりやがって、まったく！」



丸井がマウンドに行きながらうなだれている近藤に声をかける。丸井は近藤のショックの大きさを感じ取って、近藤に励ましの言葉をかけた。

丸井「でもよ、そうがつくりするな。確かにおまえはなみはずれた球を持っている。守備さえしっかりすれば、レギュラーとして十分やれるんだ。だまされたと行ってやってみな。まあ、おれも腹をたてたが忘れてやる。おまえもしっかりやれ！」

近藤「ようわかりました。おおきに……」

立ちあがった近藤はもとの近藤に戻っていた。

近藤「キャプテンさん。」

丸井「ん？」

近藤「こういう方法はどやるかと思ひまして……」

丸井「なんだ？」

近藤「ワイ、絶対にバットにさわらせん球投げられるようになるさかい！ ピッチングの練習だけっていうわけにはいきまへんか？ ワイ、どうも守備はおもろくないねん。」

「ガッン！」

丸井は持っていたバットで近藤を殴ってしまった。近藤はその場に倒れ込む……。それを見たナインは全員マウンドにかけよって倒れた近藤の様子をうかがった。

丸井「大丈夫だ。気を失っているだけだ。」

イガラシ「何をするんだ、キャプテン！」

丸井「何をするもねえ。こんなやつは、クビだ！ おれがキャプテンをやっているかぎり、こんなやつのは入り部は絶対に認めん！」

丸井は一人部屋に向かって歩き始めた。イガラシが後を追った。

イガラシ「キャプテン、なんだいまのザマは！ あれが人の上に立つ者の態度か！ しかってるんじゃない、あれはおこってんじゃないか、頭にきているんじゃないか。」

丸井「そうよ、頭にきて何が悪い。おれは仏さまじゃねえ。おれだっておまえの肩を考えて何度がまんしたんだ。しかしものには限度つてもものがあるんだ。なんだ、あの態度は、こつちがちよつとおだてりやつけあがりやがってよ。」

イガラシ「それは当然でしょ。ついこの間までは小学生だったんです。あれだけの球をもつてりゃ、天狗にならない方がおかしいですよ。」

丸井「だから、なんだってんだ！ おれは立场上、あれ以上たった一人の天狗の相手をするわけにはいかねえんだよ！」

丸井の言葉を受けてイガラシもチームワーク優先にチーム作りをしようという丸井の気持ちを感じ取った。

丸井「このさい、おまえの肩の事もあるし、できるものならおまえがやってみたらどうだ？ 確かに、やつの球がただものじゃないことは打ってみてわかった。合わせるのが精一杯でいまだに手がしびれている。」

イガラシ「いいんですか、ほんとに！」

丸井「その代わり、おまえがめんどろを見る。おらあやだかんな」

イガラシ「じゃ、そうさせてもらいます。」

部屋をでようとドアのノブに手をかけたイガラシだったが、何かに気がついたかのように振り返った。

イガラシ「そのうちキャプテンも近藤とウマが合うようになりますよ、きつと。」

丸井「冗談じゃねえ、おれはああいっただタイプがだいきらいだ。」

イガラシ「ぼくだって、最初はキャプテンにきらわれたじゃないですか。」

丸井「おまえなんか。今でも好きじゃねえよ。」

イガラシ「……。」